

【試し読み版】



# ジンプリチムス

原典訳『阿呆物語』

グリンメルスハウゼン | 作

吉田孝夫 | 訳

GRIMMELSHAUSEN  
SIMPLICISSIMUS TEUTSCH

八坂書房

12

【第Ⅲ卷第4章】

## 【第Ⅲ卷】

# 4

---

全世界をみずからに従わせ、  
全民族のあいだに平和をうちたてる  
〈ドイツの英雄〉のこと

ユピテルは答えた。「おまえの話は自然の、世にふつうに生まれた人間が思いつく域を出ておらぬな。われわれ神々にとつては、悪しき者だけを罰し、善き者が守られるように取り計らうことが可能なのだということ、そもそもおまえは知らぬようだ。わしはだな、〈ドイツの英雄〉を目覚めさせ、世に送ろうと考えておるのだ。〈ドイツの英雄〉は、鋭い剣をもって万事を完成させる。すべての凶悪な人間たちは殺され、敬虔なる人間たちの命は守られて誉れが与えられるのだ」

わたしは言った。「そうなのですか、ではそのような英雄でいらっしゃるお方には、きつと兵隊が何人も必要でしょうね。さて兵隊が必要とされるところには、必ず戦争が

起きています。そして戦争のあるところには、無実である  
うと罪にまみれていようと、すべての人がこぞって苦しみ  
を味わいます」

「わしの言うことがまったく理解できておらんようだが、  
〈地上の神々〉<sup>(1)</sup>だと言われるおまえたち支配者は、地上の  
人間どもと同じ程度の頭しかないのかね」とユピテルは言  
い返した。「わしが世に遣わそうと考えている英雄は、一  
人の兵隊も必要としないのであって、それでもこの全世界  
を根っこから直してくれるのだよ。〈ドイツの英雄〉を誕  
生させるとき、わしはヘラクレスのごとくに美しく整った、  
そして強靱なる体を授けようと思う。そして思慮深さと智  
慧と分別の力をお土産につけてやる。さらに女神ヴェー

又ス<sup>(2)</sup>からは美しい顔を授けられ、まさにナルシス<sup>(3)</sup>も、アドニスも、またわが愛するガニメデスさえも凌ぐ麗しさを手にするであろう。さらにヴェーヌスは、英雄がもつすべての美德に、格別の洗練と栄光と優美さを与えるはずであるが、これによって英雄は全世界から慕われることになるのだ。こうしたことを成就するため、わしは〈ドイツの英雄〉を誕生させるにあたっては、ヴェーヌスを殊のほか愛情こまやかに見つめてやるつもりでおる。<sup>(4)</sup>

ところでこの英雄だが、メルクリウス<sup>(5)</sup>からは誰よりも卓越して機転豊かな、切れ味鋭い頭を授けられるだろう。常に変わりゆく〈月〉は、信じられぬほどの敏捷さを英雄に植えつけることで、彼の弱点をつくるどころかむしろ有益

な力を与えるだろう。パラス・アテネ<sup>(6)</sup>は英雄をパルナツスの山で養育し、ヴルカヌス<sup>(7)</sup>はほかならぬ〈マルスの刻<sup>(8)</sup>〉に英雄のための武具を、とりわけその剣を鍛造してくれるだろう。この剣をもつて英雄は全世界を屈服させ、神を蔑ろにするすべての人間たちを打ち倒すのだ。たとえば兵隊のような形で付き従う者たちの手助けなど、まったく無用でな。この英雄に、そんなものは皆目要らん。英雄の姿を目にするだけで、大きな町がみな震えあがり、難攻不落とされる要塞がみな、ものの十五分もあれば屈服させられる。そしてついには、現世における最強の君主にたいしても指示を出す者となり、海と大地のうえにただ一つの誉むべき政府をうちたて、神々と人間がそこに相そろって喜悦を味

わうことになるのだよ」

わたしは言った。「神を蔑ろにする人間たちを、一滴の血も流すことなく滅ぼしたり、広大なる全世界に、特別に強大な武力や腕っぷしにものを言わせることなく指図をしたりすることが、いったいどのようなことにすればできるのでしょうか？ ああ、ユピテルさま、包み隠さず白状いたしますが、そのようなお話がまったく理解できないわたくしには、はかない人間どもにも劣る、駄目なオツムしかないようです」

ユピテルは答えた。「やはりな、そうであるうと思っておったわ。わが英雄の剣がいかに類い稀なる妙力を具えるものとして造りあげられるか、おまえにはわからぬと言うのだからな。ヴルカヌスは、つねづねわしの雷霆らいていを造ってき

た素材を用いて、この剣を仕上げるのだ。するとその効力のもとでは、わが英雄が剣を鞘から抜き、わずか一振り宙を斬るだけで、もし仮に敵軍がまるまる一スイス・マイル<sup>(9)</sup>も離れた山のうしろに隠れていようとも、一瞬にして敵兵のすべての頭を、その胴体から落として転がすことができ。つまり敵の悪魔ヤロウどもは、自分の身に何が起きたのか気づくひまもなく、頭を失ってあちこちに倒れていくほかないのだよ。

さて、いざ出陣をしたへドイツの英雄は、ひとつの町か要塞かの門前に到着すると、皇帝ティムール<sup>(10)</sup>の流儀に基づいてふるまうことになる。つまりだな、自分がこうして到来したのは、ほかでもなくまさに平和をもたらすため、

万人の幸いを守り、育くむためであることの徴として、白い旗を掲げるのだ。そして、もしこの段階で人びとが英雄のもとに寄り集い、その意に従うようであれば、これで一  
件落着ということになる。ところがだ。もし民が服従を拒  
むようであれば、英雄は革の鞆からさっきのあの剣を抜き、  
町にはびこるすべての魔術師、魔女たちの首をころりと斬  
り落として、赤い旗を掲げるであろう。もしそれでも、ま  
だ住民たちが英雄のもとに参集しないようであれば、ここ  
で英雄は、あらゆる殺人鬼、悪徳商人、泥棒、ごろつき、  
詐欺師、姦通する連中、淫売の女や若者どもを、さっき言  
った仕方  
で一人残らず殺してしまい、黒い旗をたなびかせ  
ることになる。そして万一これでもまだ、町のなかに残っ

ている人民たちが英雄のもとに集い、つつましく服従することを望まないなら、英雄は町そのものを滅ぼすことを決意し、住民たちを頑なで高慢な民だと判断して、皆殺しにしようと考えられるかもしれない。ただし実際に処刑されるのは、民が早くに服従するのを邪魔しつづけ、いつまでもその原因でありつづけていた一部の者たちだけであろうがな。

さて英雄は、この後、町から町へと巡り歩いていくことになる。そしてそれぞれの町に、その周囲に広がる一まとまりの土地を委ねて、これを平和裏に統治するように命ずるのだ。それからドイツ全体の町という町に布告を出し、それぞれに二名ずつの、最も賢明にして最も学識ある男たちを選ばせ、その者たちを構成員とする一つの議会をつく

らせる。すべての町は英雄の支配のもとに、永遠に一つの共同体をなし、農奴制は、あらゆる関税、税金、利子、小作代、消費税とともに、ドイツの全土で廃止される。こうしてあらゆる賦役労働、見張りの任務、強制徴発、金銭の調達、戦争、その他さまざまの苦役から民衆は解放され、それと無縁になり、あのエリユシオンの園(11)よりも大いなる幸せのなかで暮らすことができるようになるのだ。

それが実現したあかつきにはだな——とユピテルはさらに話しつづけた——、わしはコーラム・デオールムの総勢を引き連れて、ドイツ人たちのもとへ天界から降り来たり、ドイツ人たちが育てるへ自分のぶどうの木の下、いちじく(12)の木の下で、まこと楽しい時間をすごすつもりじゃ。そしてド

イツ人たちの国土に詩神の山ヘリコン<sup>(13)</sup>をつくり、詩神ムーサイたちをあらためてそこに住まわせてやる。わしはドイツの国を、幸い多きアラビアやメソポタミア、もしくはダマスクスの町の周囲に広がる一帯よりももっと壮麗に、そして溢れかえる豊かさをもつて祝福するつもりじゃ。ギリシャ語を使うことはもうやめて、もっぱらドイツ語だけを話すようにする。端的に言えば、みずからのふるまいを他ならぬ〈善きドイツ人〉のごとくにして、最終的には、かつて古えのローマ人たちにも認めたがごとく、未来のドイツ人に全世界を統べる権利を授けてやろうと思うのだ——<sup>(14)</sup>」

わたしは言った。「至高の神であるユピテルさま、しかしもしそういう世の中になりますと、世の王侯、貴族たちは

何を言い出すでありますようか。やがて到来されるとかい  
う〈英雄〉なるお方がですね、畏れ多くも自分たちの先祖  
伝来の財産を不当にも奪いとり、それを一つひとつの町に  
分配してしまふ、というわけですね？ そうなると、領主  
や貴族たちはきつと武力をもつて激しく抗うのではありま  
せんか。もしくは少なくとも、神々と人間にむけて抗議の  
声をあげるのではありますまいか」

ユピテルは答えて言った。「それしきのことと、およそ英  
雄が頭を悩まされることはないのだ。英雄は、すべての高  
位の者たちを三つのグループに分ける。そしてまず人の倫<sup>みち</sup>  
を外れた、悪徳の生活をおくっている者に、下じもの民た  
ちが世に強いられるのと変わらぬ厳しい罰を与えるである

う。〈英雄〉がふるう剣を前にしては、現世のいかなる武力も風前の灯火であるからな。

それでだが、これ以外の残った者たちには、国のなかにとどまるか、ここを出ていくか、どちらかの道を選ぶように求める。祖国を愛するがゆえにとどまる者たちは、下じもの民と同じ暮らしをすることになる。しかしこの時、ドイツ人たちの日々の暮らしは、当今の世を支配する王の暮らし、王の玉座よりもずっと心地よく、幸せなものとなるであろうな。その時ドイツ人は、みなおしなべてファブリキウス<sup>(15)</sup>のごとき者となるのだ。みずからの名誉と美德とともに、祖国をもきわめて高く愛したがゆえに、ピュロス王とのあいだで国土を分かち合おうとしなかったあのファブ

リキウスのようにな。これが先に言った二番目のグループにあたる。

さて三つ目は、根っからの君主であつて、永遠に民だみを支配していたい者たちから成る集団で、〈英雄〉はこれをハンガリーからイタリアを通過してモルドヴァやワラキアへ、マケドニアやトラキア、ギリシャへ、はたまたヘレスポントスの海峡<sup>16</sup>を越えてアジアへと連れてゆくだろう。すると〈英雄〉は、この第三の集団のために、まずこれらの国土を手中におさめ、それからドイツ全土にはびこる戦争屋たちを呼び集める。そしてこの集団に属する一人ひとりに土地を分け与え、それぞれの国の王とならしめるのだ。もしこれが成就すれば、〈英雄〉はわずか一日のうちにも

コンスタンチノープルを陥落<sup>(17)</sup>させることができような。そしてキリスト教への回心やわれわれへの服従を拒むトルコ人すべての首級を斬り落とし、そいつらの背中のうえ、尻の手に置いてやるわけだ。〈英雄〉はこの時、ここにあるローマ帝国を再興することを果たすのだとも言えよう。

さて次に〈英雄〉は、あらためてドイツへと戻ってくる。そして議会の貴人たち——すでに話したように、これはドイツ全土の町から各二名ずつ召集された者たちで、〈英雄〉は彼らを祖国ドイツの指導者に任命し、〈父祖〉と名づけることにするのだが——、この者たちと協力して、ドイツの中心部に一つの町を建設する。それはアメリカのマノア<sup>(18)</sup>の町よりも遙かに大きく、ソロモン王の御代のエルサレム

よりも黄金に満ち溢れ、その城壁はチロルの山岳にも、町を囲む水濠はスペインとアフリカのあいだの海(19)の広さにも比すべき壮大さなのだ。〈英雄〉はそこにダイヤモンド、ルビー、エメラルド、サファイアといった、宝石だけで作られた神殿を建造する。そしてこの屋敷には〈珍品陳列室クンストカンマー〉を整備し、世界中で蒐集されたあらゆる稀少な品物が保管される。たとえば中国やペルシアの王が、東方インドのムガル大帝(20)、タタールの大王ハン(21)、アフリカのプレスター・ジョン(22)、モスクワの大帝ツァーリが献上してきた宝物たちだ。ここにはおそらくトルコの皇帝も、必死で加わろうとするであろうな。〈ドイツの英雄〉がトルコ帝国の国土を奪いとり、所領としてローマ皇帝に与えたりせぬようにと

」  
わたしはユピテルに尋ねた。「そのような時代が来ると  
しますと、それではキリスト教国の王さまがたはどのよう  
な運命となるのでしょうか？」

ユピテルは答えた。「イングランド、スウェーデン、デン  
マークの王は、その王冠と王国を、そしてそこに編入され  
る領地をすべて、ドイツ国から所領として、喜んで与えら  
れる。なぜならこれらはドイツ人と同じ血筋、出自である  
のだからな。スペインとフランス、ポルトガルの王も同様の  
扱いとなろうが、それは古代のドイツ人がかつてこれら<sup>(23)</sup>  
の国ぐにを支配し統治していたからだ。こうして全世界の  
すべての民族のあいだには、まさに皇帝アウグストゥスの<sup>(24)</sup>

治世のごとく、永遠に続く平和が訪れるであろうなあ——」

〔訳註〕

- (1) 支配階級である王侯に常套的に用いられる表現。
- (2) 愛と美の女神。
- (3) ガニユメデス、アドニスとともにギリシャ神話に登場する美少年。少年愛の理想像。
- (4) 占星術における木星と金星の〈合〉の状態。
- (5) 商人、旅人、死者などの神。水星に相当する。
- (6) ゼウスの娘。知と学芸の女神。
- (7) 火と鍛冶の男神。神々の武器を作る。IV―25章も参照。
- (8) マルスの神(火星)が支配する戦争の時代に、という意味。
- (9) 〈ドイツ・マイル〉と呼ばれた単位が四千歩の距離であったのに対し、

こちらは五千歩。

(10) I-17章註18を参照。

(11) ギリシャ神話において至福の者、英雄、生前に善行をした者たちが死後に住む楽園。

(12) ミカ書<sup>ト</sup>の表現。作者は好んで著作の随所に用いる。例えば本作ではV-1・5章・VI-2章など。

(13) 芸術の神ムーサ(ミューズ)を祀るギリシャの聖なる山。

(14) 神聖ローマ帝国を古代ローマ帝国の正統な後継者とする、十八世紀末まで有効であった帝権移譲論(Translatio Imperii)の考えが背後に見える。

(15) 共和政ローマの執政官ガイウス・ファブリキウス・ルススキニウス。プルタルコス<sup>ト</sup>の記録によれば、ヘラクレアの戦い(前二八〇年)で敵軍ピュロス王からのあらゆる甘言、賄賂にも動じず、誠実に職務を遂行した伝説的な人物。

(16) エーゲ海とマルマラ海を結ぶダーダネルス海峡のこと。

(17) 現イスタンブール。一四五三年にオスマン・トルコ帝国の支配下に入る。キリスト教世界にとっては、〈世の終わりの皇帝〉の導きによっ

てこの町を奪還することが黙示録的な希望の表現となる。

(18) 今日のベネズエラにあると想像された〈エルドラド〉、すなわち黄金の満ち溢れる国の町。

(19) ジブラルタル海峡のこと。

(20) 十六世紀、インド東部に興った大帝国の指導者の呼び名。「ムガール」の名は「モンゴル」のペルシャ語形に由来する。

(21) チンギス・ハン(一一五五—一二二七)の後継者としてのモンゴル帝国の系譜にあるペルシャ地域のイスラム王朝の王者の呼び名。

(22) 中世ヨーロッパに生まれた伝説では、ジョン(ヨハネ)という名の司祭が十二世紀にアジアないしアフリカでキリスト教の王国を建設したとされる。アビシニア(エチオピア)は一四八六年にその王国になぞらえられた。

(23) 民族大移動期の古代ゲルマン民族のこと。

(24) 古代ローマの皇帝オクタヴィアヌス(前六三—後一四)の治世は、三十年戦争のドイツでは平和と繁栄の時代として理想化された。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・  
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その12

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年四月五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。  
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>